読み替えゼア教室

外国語学部４年　平田大祐

選んだ本のタイトル：

教養としての経済学　生き抜く力を養うために

著者：一橋大学経済学部

出版社：有斐閣

出版年：2013年2月25日

もっと自由に、楽しく、経済学。

　経済学というと馴染みの無さそうなイメージがある。教養と言われると高尚な香りがする。なんてことを考えながらまえがきに目をやると、「経済学を通して世を見直すと、世の中で起きている出来事を改めて捉え直すことができる」とある。へーなるほど、と一服。

だとすれば経済学は学問の最前線を切り拓く専攻分野であると同時に、人生をよりよく生き抜く「知恵」とも言えるのかもしれない。

　本書は、一橋大学経済学部発のエッセイ集。

身近な経済問題から大きな社会問題、経済学的なものの考え方や外国語の学習にまで話題は及ぶ。一節完結方式なので、興味のあるトピックを拾い読みできる。トピックも金融危機，増税，マクロ経済学，ミクロ経済学，英

語，統計学と、ニュースでよく聞く言葉や、この本を開いた人の関心を引くものばかり。読者の興味に合わせて経済学の世界を覗き見できるのがこの本の何よりの魅力といえる。

しかし、私が最もオススメしたい点は、各節の末尾にある読書案内だ。例えば、マクロ経済学をテーマに扱った節なら、その節の執筆者が、経済成長がどのように国内外に影響を与えるかなどといった観点から関連書を挙げてくれている。この本を足がかりに、我々はより深く経済学の世界に切り込める。敷居は低く、だが知的好奇心はとことん刺激する。

そんな著者らの心構え、言わば経済学と読者に対する愛と言うべきものが滲み出ている。

この本の一節にバングラデシュのグラミーン銀行が行ったマイクロ・クレジットという貸付制度が紹介される。貧困層向け金融の回収リスクを、グループ借入という仕組みを導入して見事に解消し、なおかつ借入者側の持

続的経営にも寄与した事例だ。ここで私は本書の言う教養というものが腑に落ちた。逆境を乗り越えるために人々が行う知的な努力。これが教養というのだろう。ならば教養は、高尚というよりもむしろ、副題にもある通り、

現代社会を生き抜くための武器なのかもしれない。

　この本は最初から最後までcover-to-coverで通読するもよし。好きな項目を拾い読みするもよし。読書案内でさらなる本に手を伸ばすもよし。読者の望む読み方で、好きなように、この本は楽しむことができる。そしてそれは、読者の自由に経済学の世界に赴けることを意味する。つまり好きに楽しんでいいのだ。この本も。経済学も。